

Ⅲ 全国学力・学習状況調査校種及び教科別調査結果

1 小学校国語

(1) 学習指導要領の領域別

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	14	69	66	65.6	105.2※
言葉の特徴や使い方に関する事項	5	72.3	69.4	69.0	104.8
情報の扱い方に関する事項	0				
我が国の言語文化に関する事項	1	82.1	79.5	77.9	105.4
話すこと・聞くこと	2	68.3	66.7	66.2	103.2
書くこと	2	53.7	48.7	48.5	110.7
読むこと	4	68.4	65.6	66.6	102.7

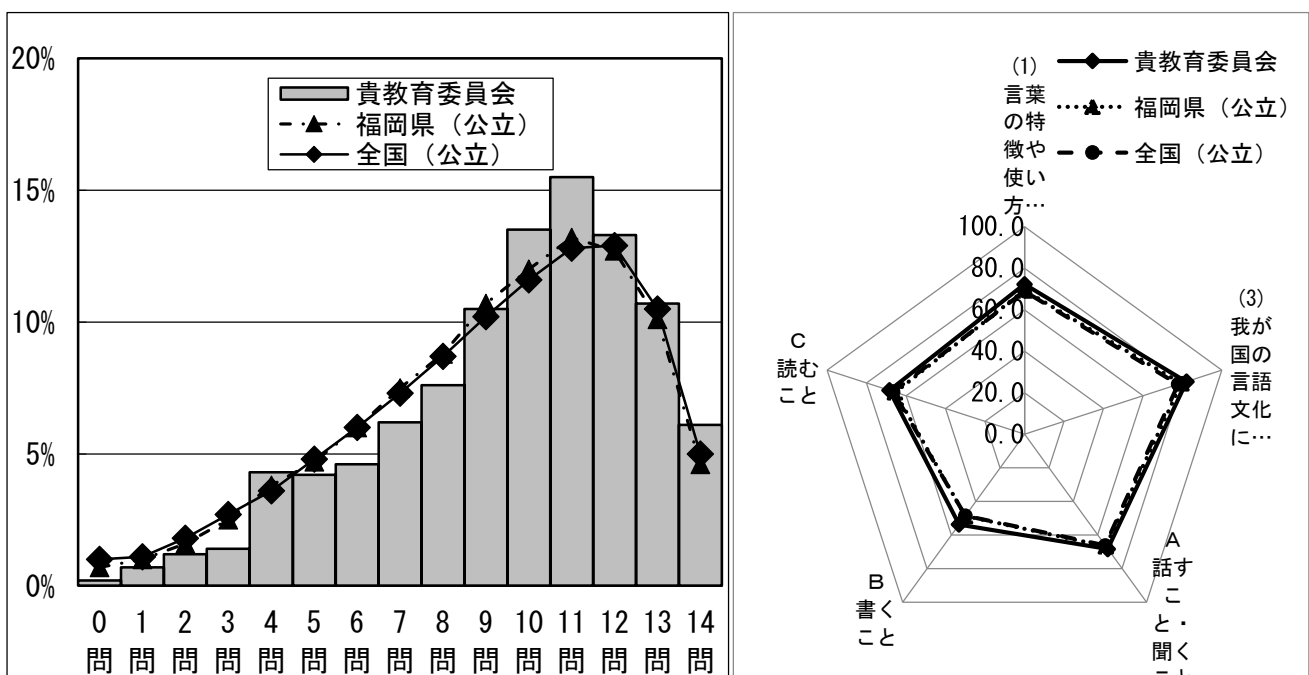
(2) 評価観点別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	6	73.9	71.1	70.5	104.8
思考・判断・表現	8	64.7	61.6	62.0	104.4
主体的に学習に取り組む態度	0				

(3) 問題系識別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	8	74.1	71.7	71.3	103.9
短答式	3	67.5	64.2	63.6	106.1
記述式	3	55.4	51.1	51.2	108.2

(4) 小学校国語の生徒の正答数分布グラフ(左)と学習指導要領の内容の平均正答率の状況(右) 「正答数分布グラフ」 <学習指導要領の内容の平均正答率の状況>



(5) 分析

ア 全般

- ① 全ての分類・区分において、全国を上回る結果が出ている。
- ② 「書くこと」が他の領域よりも低い所は、全国や県と同じ傾向を示しているが、全国比に直すと非常に高い数値を示している。
- ③ 問題形式別では、記述式の平均正答率の値は低い、全国比に直すと非常に高い数値を示している。
- ④ 全国と比べ、無回答率が全ての問題において低い。

イ 領域別

学習指導要領領域別区分の平均正答率、最上位と最下位の差は約 28 ポイントである。昨年度が 33 ポイント以上だったため若干区分間の差が少なくなっている。

「書くこと」と「記述式」にあたる区分の平均正答率が 50% 台で、他の区分はすべて 60% 以上あるため、苦手になっているといえる。

① 思考力・判断力・表現力「A 話すこと・聞くこと」

出題の趣旨：「互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、自分の考えをまとめることができるか」

大問 1 四：正答率 49.8% 第 5・6 学年才

授業改善の視点

「考えをまとめる」とは、話し合いを通して様々な視点から検討し、互いの意見の共通点や相違点、利点や問題点等をまとめることである。話し合った後で考えをまとめる際には、様々な視点から検討したことを踏まえて、自分の考えをまとめることが求められる。異なる意見を自分の考えに生かせるように、例えば「～という意見もあったが」、「～という考えもあるけど」などの表現を用いられるようにすることが効果的である。

学習指導に当たっては、話し合いを始める際に話し合いの目的や方向性を検討すること、話し合いの展開や内容を踏まえて互いの意見を整理すること、様々な視点から検討して自分の考えをまとめることなどが重要である。

② 思考力・判断力・表現力「B 書くこと」

出題の趣旨：「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けることができるか」

大問 3 二：正答率 45.5% 第 5・6 学年才

授業改善の視点

「共有」に関する指導事項の定着を図るためには、互いに文章に対する感想や意見を伝え合うことを通して、自分の文章のよいところを見付けることができるように指導することが重要である。

本設問では、「六年生としてがんばりたいこと」を伝えることが目的であり、【伝え合い様子の一部】において、島谷さんは、「自分がかんばろうとしていることが伝わるかな」と川口さんに聞いている。また、【伝え合い様子の一部】の川口さんのように、「最後の段落がいいね。なぜかという、～」というように、よいところを具体的に言葉で表している。

学習指導に当たっては、伝え合う経験を積み重ねていくことで、自分の文章のよいところを見付けたり、それを言葉で表したりする指導が大切である。本設問のように、自分が書いた目的や意図を相手に伝えたり、感想や意見を具体的に伝え合ったりすることができるように指導することが効果的である。

5 小学校算数

(1) 学習指導要領の領域別

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	16	66	63	63.2	104.4※
A 数と式	6	73.9	70.7	69.8	105.9
B 図形	4	67.5	63.8	64.0	105.5
C 変化と関係	4	51.9	50.6	51.3	101.2
D データの活用	3	73.5	69.1	68.7	107.0

(2) 評価観点別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	9	70.5	68.0	68.2	103.4
思考・判断・表現	7	61.3	57.4	56.7	108.1
主体的に学習に取り組む態度	0				

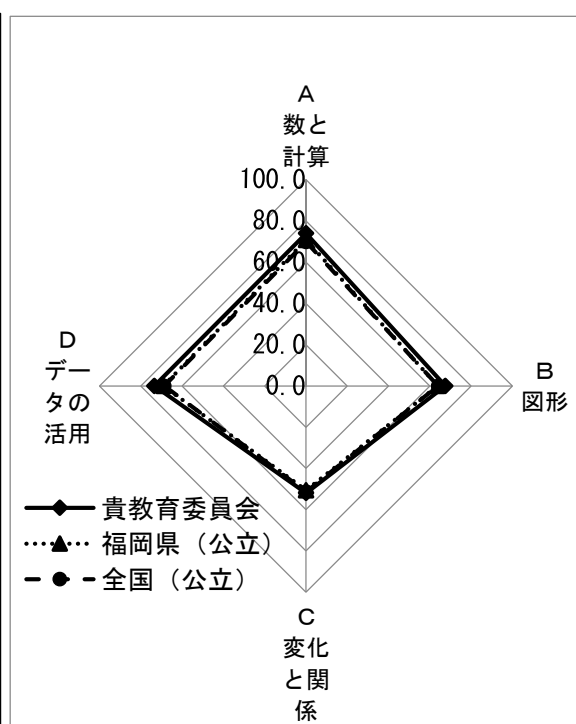
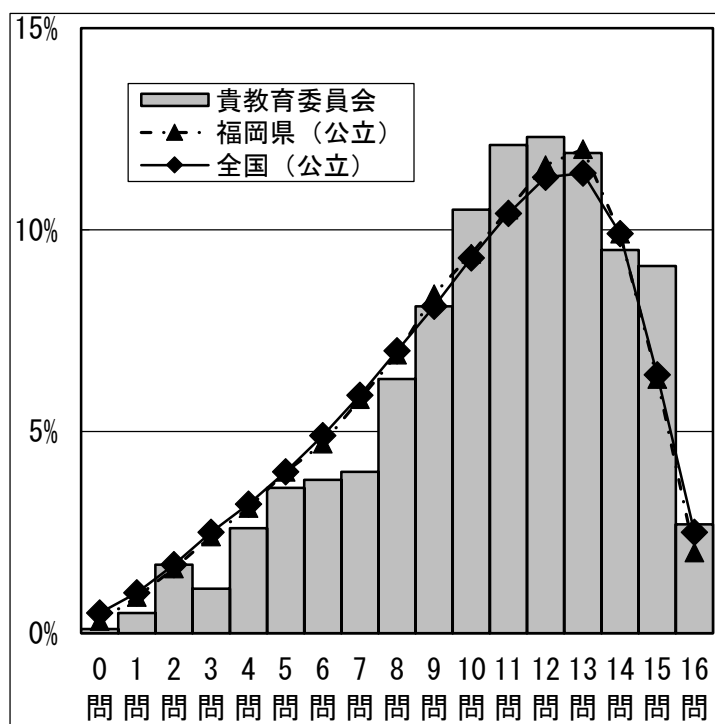
(3) 問題系識別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	6	54.0	51.5	51.8	104.2
短答式	6	79.2	76.3	76.5	103.5
記述式	4	66.1	61.8	60.2	109.8

(4) 小学校算数の生徒の正答数分布グラフ (左) と学習指導要領の内容の平均正答率の状況 (右)

「正答数分布グラフ」

<学習指導要領の内容の平均正答率の状況>



(5) 分析

ア 全般

- ① 全ての分類・区分において、全国を上回る結果が出ている。
- ② 「変化と関係」が他の領域よりも低い所は、全国や県と同じ傾向を示している。全国比においても数値が低く本市の児童も苦手な領域である。
- ③ 問題形式別では、選択式の平均正答率の値は低い。

イ 領域別

学習指導要領領域別区分の平均正答率、最上位と最下位の差は22ポイントで、昨年度(28ポイント)よりも若干差が小さくなっている。

① 知識・技能「C 変化と関係」

出題の趣旨：「示された場面のように、数量が変わっても割合は変わらないことを理解しているか」

大問2(3)：正答率19.2% 第5学年5(3)ア(ア)

授業改善の視点

日常の具体的な場面に対応させながら、飲み物の量に対する果汁の量の割合が、飲み物の濃さを表していることを理解できるようにすることが重要である。その際、飲み物を分けても、飲み物の濃さは変わらないという生活経験を想起できるようにすることが大切である。

指導に当たっては、例えば、本設問を用いて、果汁が含まれている飲み物を二つに等しく分けても、飲み物の濃さは変わらないという生活経験を想起しながら、飲み物の量に対する果汁の量の割合は変わらないと判断する活動が考えられる。その際、下の図のように、生活経験を基にした判断と、飲み物の量に対する果汁の量の割合を計算で求めた結果を関連付けて考えることができるようにすることが大切である。

② 思考・判断・表現「A 数と計算」

出題の趣旨：「示された場面において、目的に合った数の処理の仕方を考察できるか」

大問1(4)：正答率34.5% 第4学年(2)イ(ア)

授業改善の視点

日常生活において、数の大きさを見積もる必要があるときは、目的に応じて数を大きくみたり小さくみたりして、概算できるようにすることが重要である。その際、概算にする方法である切り上げ、切り捨て、四捨五入を用いて計算し、どの方法が適切であるかを判断できるようにすることが大切である。

指導に当たっては、例えば、本設問を用いて、1個入り85円のカップケーキ21個分の値段と、Bセット1箱分の値段である1470円では、どちらの方が高いかを予想し、確かめる活動が考えられる。その際、確かめるときには、 85×21 を計算し、1個入り85円のカップケーキ21個分の値段を求めて1470円と比較するだけでなく、 85×21 の85と21を概数にして見積もり、1470円よりも必ず高くなることを判断できるようにすることが大切である。

③ 思考・判断・表現「C 変化と関係」

出題の趣旨：「伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、未知の数量の求め方と答え方を式や言葉を用いて記述できるか」

大問2（4）：正答率 50.7% 第5学年（1）イ（ア）

授業改善の視点

伴って変わる二つの数量を見だし、一方の数量に伴って他方の数量がどのように変化するかに着目して、未知の数量を求めることができるようにすることが重要である。その際、表に整理して、二つの数量の関係に着目できるようにすることが大切である。また、二つの数量から割合を求めるだけでなく、示された割合になる二つの数量を考えることができるようにすることも大切である。

指導に当たっては、例えば、本設問を用いて、伴って変わる二つの数量のデータを何組か集めて表に整理し、比例関係を見いだす活動が考えられる。その際、一方の数量のみに着目するのではなく、二つの数量がどのように変わっていくかに着目し、果汁の量が2倍、3倍、…になると、それに伴って飲み物の量も2倍、3倍、…になっているという比例の関係を捉え、未知の数量を求めることができるようにすることが大切である。

6 小学校理科

(1) 学習指導要領の領域別

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	17	67	63	63.3	105.8※
「エネルギー」を柱とする領域	4	56.6	52.0	51.6	109.7
「粒子」を柱とする領域	5	64.9	60.0	60.4	107.5
「生命」を柱とする領域	5	77.9	75.0	75.0	103.9
「地球」を柱とする領域	5	68.8	64.8	64.6	106.5

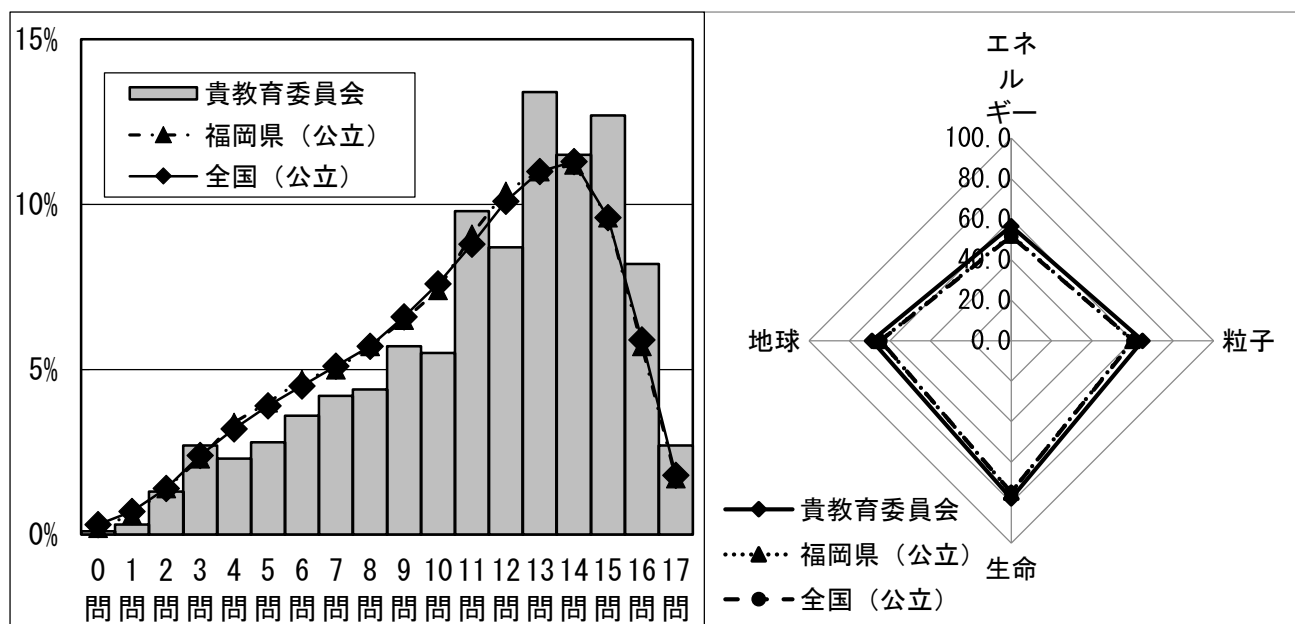
(2) 評価観点別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	6	65.9	62.0	62.5	105.4
思考・判断・表現	11	67.9	63.9	63.7	106.6
主体的に学習に取り組む態度	0				

(3) 問題系識別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	11	69.4	66.5	66.8	103.9
短答式	3	71.4	65.5	66.2	107.9
記述式	3	54.9	48.7	47.3	116.1

(4) 小学校理科の生徒の正答数分布グラフ (左) と学習指導要領の内容の平均正答率の状況 (右)
 「正答数分布グラフ」 <学習指導要領の内容の平均正答率の状況>



(5) 分析

ア 全般

- ① 全ての分類・区分において、全国を上回る結果が出ている。
- ② 「エネルギー」を柱とする領域の平均正答率が50%台で、他の領域よりも低い所は、全国や県と同じ傾向を示している。
- ③ 問題形式別では、記述式の平均正答率が50%台で、他の形式よりも低い所は、全国や県と同じ傾向であるものの、全国比は高い数値を示している。

イ 領域別

学習指導要領領域別区分の平均正答率、最上位と最下位の差は約21ポイントで、他の教科に比べて差が小さいが、領域別区分差は大きい。

① 知識・技能「『エネルギー』を柱とする領域」

出題の趣旨：「日光は直進することを理解しているか」

大問3 (1) : 正答率32.7% 第3学年A (3) ア (ア)

授業改善の視点

知識をより深く理解できるようにするためには、主体的な問題解決を通して知識を習得できるようにすることや、習得した知識を実際の自然の事象・現象と関連付けて説明できるようにすることが重要である。
 指導に当たっては、例えば、光の進み方に関する問題について、はね返した日光を地面に当てたり、はね返した日光の間に紙を入れたりなどして、主体的に問題解決をする中で、はね返した日光が直進することを捉え、本設問のような場면을説明する学習が考えられる。

② 思考・判断・表現「『エネルギー』を柱とする領域」

出題の趣旨：「実験で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもち、その内容を記述できるか」

大問3（4）：正答率 32.7% 第3学年 A（3）ア（ア・イ）

授業改善の視点

観察、実験などで得た結果について分析して、解釈し、より妥当な考えをつくりだすことができるようにするためには、結果を事実として分析して、解釈し、それを結論の根拠として表現できるようにすることが重要である。

指導に当たっては、結果の具体的な数値や、それを分析した内容などを根拠として表現する場面を設定することが大切である。例えば、問題に対するまとめを行う際に、結果を具体的な数値として学級内で共有し、何を結論の根拠としているのかを明らかにし、より妥当な考えをつくりだす学習活動が考えられる。その際、結果を基に結論の根拠を記述することが難しい場合には、結論の根拠の記述例を示し、適切なものを選ぶことができるようにすることも考えられる。

③ 思考・判断・表現「『地球』を柱とする領域」

出題の趣旨：「観察などで得た結果を、結果からいえることの視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができるか」

大問4（3）：正答率 48.7% 第4学年 B（4）ア（イ）

授業改善の視点

観察、実験などで得た結果について分析して、解釈し、より妥当な考えをつくりだすことができるようにするためには、提示された資料から数量、変化の大きさなどの特徴を読み取り、自分の考えを表現できるようにすることが重要である。

指導に当たっては、結果などから結論を導き出すために必要な数量、変化の大きさなどの特徴を見つけ、自分の考えをもち、それらを話し合う場面を設定することが大切である。例えば、1日の気温の変化のグラフから、天気の様子と気温の変化の大きい時間帯や小さい時間帯との関係について読み取り、天気と気温の変化と関わりについて話し合う学習活動が考えられる。

④ 思考・判断・表現「『粒子』を柱とする領域」

出題の趣旨：「自然事象・現象から得た情報を、他者の気付きの視点で分析して、解釈し、自分の考えをもち、その内容を記述できるか」

大問2（4）：正答率 50.1% 第4学年 A（1）ア（ウ）、

第5学年 A（1）ア（ウ）

授業改善の視点

自然の事物・現象に働きかけて得た事実について、自分や他者の気付きを基に分析して、解釈し、問題を見いだすことができるようにするためには、事実を比較し、差異点や共通点を捉えることができるようにすることが重要である。

指導に当たっては、自然の事物・現象に働きかけて得た事実について話し合う中で、自分や他者の気付きを捉え、主に差異点や共通点を基に、問題を見いだす場面を設定することが大切である。